

3. 入間市金子地区における農業の変遷

田林 明（筑波大学地球科学系）

3.1 はしがき

荒川と多摩川にはさまれた地域は広義の武蔵野台地であるが、そこには大小の河川が流れしており、それらの河川によって段丘が形成されている。この段丘面は高い方から低い方にむかって下末吉面と武蔵野面、立川面に区分されている。入間川の支流の霞川の南に広がる下末吉面は金子台と呼ばれており、入間市の西端部では標高約170m、東端部では標高約100mと東にゆるやかに傾斜している。金子台は厚さが10m前後のローム層におおわれていて、その下に厚い段丘礫層がある。ローム層や段丘礫層は水を透しやすく、台地に降った雨は地中にしみこんでしまうために、水田として利用することは困難で、畠地や樹園地として利用してきた。

金子台の現在の農業的利用で卓越するものは茶園であり、平坦な台地面のほとんどが、きれいに刈り込まれた茶樹の畠と、防霜ファンの列によっておおわれている。この報告では金子台西部の入間市金子地区を取り上げるが、ここには特に茶園が集中している。1995年の農業センサスによると、金子地区の総経営耕地面積は339haであり、そのうちの72.9%にあたる247haが茶園であり、残りの大部分は普通畠であった。入間市全体の茶園の42.6%、埼玉県全体の18.3%が金子地区に集中していることになる。金子台の北に広がる加地丘陵と南の狭山丘陵の間の地域を狭山と呼ぶが、この地域の古くからの特産物が狭山茶であり、入間市金子地区はまさにその核心地域である。金子地区は1889年の町村制によって加地丘陵の南のいわゆる「根通り」に位置する木蓮寺村ほか8か村が合併して成立した金子村の範囲であり、1956年に豊岡町や宮寺村、藤沢村と合併して武蔵町の一部となった。武蔵町は1966年に西部町や元狭山村の一部を加えて入間市になった（入間市史編さん室、1994）。

金子地区が茶栽培に特化するようになったのは古い時代ではなく、1960年代以降のことである。狭山茶についてはすでに村本（1957）や山田（1970）、宮沢（1984）、稻葉（1985）らの地理学的研究があり、さらに歴史的な報告も多いが、この報告では、これらを参考にし既存の統計資料や地図などの分析と、現地での聞き取りや景観観察に基づいて、金子地区の農業の変遷を、土地利用と農業経営の側面から明らかにする。特に古くからこの地域の商品作物生産の中心であった茶業の動向に注目する。

従来の研究や現地調査から判断すると、明治期以降の金子地区を含む金子台の農業は一貫して畠作が中心であったが、主力作物生産によって次の3つの時代に区分される。まず、第1期は明治初期から1950年代までであり、夏作の甘藷と陸稲、冬作の小麦と大麦といった主穀作物と、桑や茶のような商品作物の生産を組み合わせる農業で特徴づけられる。第2期の1960年から1980年までは茶栽培が急速に拡大した。この時期には農家に兼業が急速に浸透し、兼業をするかたわら耕地維持・農業省力化をするために、茶栽培が拡大した。最後の時期は1980年以降で、都市化が急速に進み、土地利用と労働力において都市的要素と農業的要素が競合し、結局は農業が後退する結果となった時期である。以下では、この時代区分に従って、金子地区の農業の変遷を整理してみる。

3.2 主穀・小商品作物栽培と土地利用（1950年代以前）

1) 伝統的な主穀・小商品作物栽培

明治初期の金子地区の農地は、現在と同様に畑地が大部分を占めていた。『武藏国郡村誌』には1875年（明治8）頃の農地の利用形態が示されているが、現在の金子地区を構成する9つの大字では、いずれも畑地が大部分を占めており、金子地区全体の595.4haの農地のうちの97.7%にあたる581.8haが畑地であった（表3-1）。水田は13.6haにすぎなかった（入間市史編さん室, 1994）。このような状況が、1881年（明治14）に参謀本部陸軍部測量局によって測量された2万分の1地形図から作成した土地利用図からも明らかである（図3-1）。これによると、北の加地丘陵と南の霞川の間の東西に伸びる細長い緩傾斜に集落が連続して立地しており、これを根岸集落と呼んだ。そしてこの集落を貫く通りが根通りである（村本, 1960）。集落の南の霞川ぞいに水田がわずかに広がっていた。その南には霞川の谷よりも10mほど高い平坦な畑地が広がっており、その中にわずかに茶園が点在していた。聞き取りによると元々茶は畑の境界や畦畔に植えられたということであるので、地形図には示されていないものが多い。さらに南には広大な林地が残されており、その一部がまとまった茶園となっていた。

表3-1 1875年頃の入間市金子地区の諸集落における農地と産業

集落名		木蓮寺	嶺	寺竹	三ツ木	上谷ヶ貫	下谷ヶ貫	花ノ木	中神	根岸
課税 対象地	合計(ha)	71.3	80.6	132.6	19.9	90.0	90.5	18.8	68.3	34.1
	畑(ha)	70.3	77.0	129.0	19.5	88.6	89.1	12.1	62.7	33.5
	田(ha)	1.0	3.6	3.1	0.4	1.4	1.4	0.6	1.5	0.6
	林(ha)	0	0	0.5	0	0	0	6.1	4.1	0
戸数(戸)		77	81	87	39	67	56	23	51	43
物産	製茶(貫以外は斤)	1,120貫	9,000	7,500	1,500貫	500	3,000	800	5,130	1,200貫
	繭(石)	24	16	450	50	25	35	9	10	40
	縞木綿(反)	5,000	6,000	4,000	5,500	4,700	5,000	800	2,500	800
一戸当り田畠(10a)		9.2	9.9	15.2	5.0	14.0	16.1	5.5	12.5	7.9
一戸当り繭生産額(円)		3.86	2.45	64.09	15.88	4.62	7.24	4.85	2.43	11.53
一戸当り縞木綿生産額(円)		38.96	44.44	27.59	84.61	42.09	53.57	20.87	29.41	11.16

入間市史編さん室（1994）：『入間市史』により作成

当時の畑地では夏作として陸稻と甘藷、粟が栽培されており、冬作としては大麦と小麦が栽培されていた。これらの自給的な主穀作物のほかに、商品作物として桑と茶、そして藍が栽培されていた。金子地区では、藩政期には下畑が多く、木蓮寺や三ツ木、寺竹では18世紀中頃の記録では下畑が6~7割を占めていた。1878年の木蓮寺村の平均地価は12円36銭で入間郡でも低い部類に属した（入間市史編さん室, 1994）。このように金子地区は稲作が不振の畑作地帯であるとともに、畑地としても肥沃なところではなかった。このため、現金収入源として江戸末期から茶栽培が行われ、さらに開港にともなう生糸の輸出増大によって養蚕が盛んになった。このほかの現金収入源と

しては、縞木綿の生産があった。金子地区ではいずれの集落でも縞木綿の生産が、繭からの生産をうわまわっていた（表3-1）。しかし、この地区では綿は栽培されておらず、茨城県や群馬県から、あるいは輸入の綿を利用して、女性労働力による副業というかたちで機織りが行われ、これが低い生産力の畑作農村にとって重要な収入源であった（表3-1）。

低い生産力を向上させるために、肥料の投入が不可欠であり、武蔵野の畑作地帯では藩政期から、糠と灰と下肥、堆肥などをませたものが用いられていた。なかでも糠と灰が重要であり、これらは江戸（東京）から購入され、特に生産力の低い畑に重点的に投入されていた。これらの肥料購入のためにも、現金収入が必要で、そこで茶や繭のような商品生産が不可欠であった。

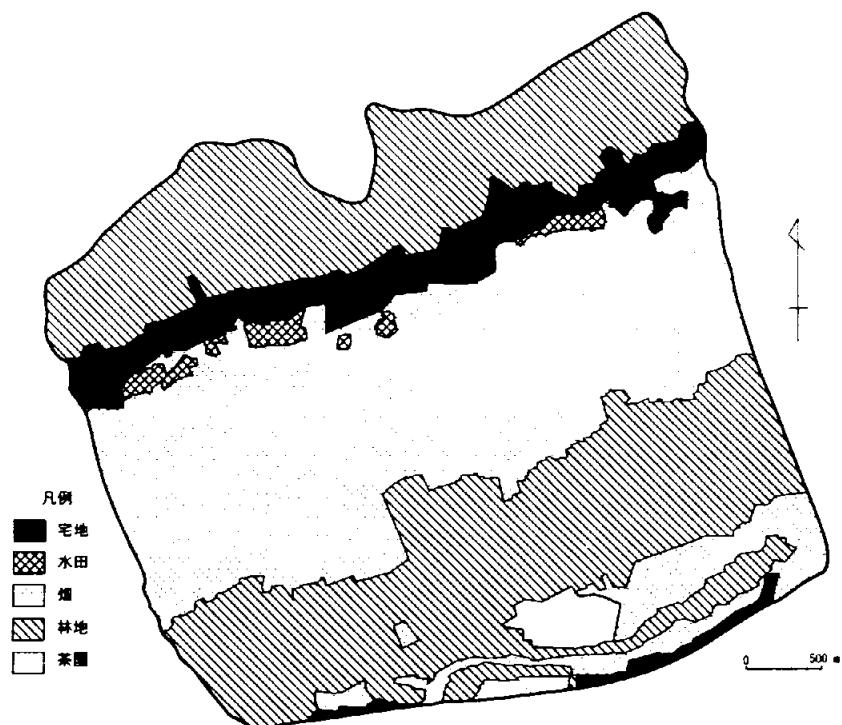


図3-1 入間市金子地区の土地利用（1881年）
明治14年測量 参謀本部測量局 2万分の1地形図「扇町屋村」により作成

2) 茶業と養蚕業の拡大

ところで狭山茶は、1191年（建久2）に栄西禅師が中国大陆から持ち帰った茶種子を、明惠上人が武蔵野国河越に植栽し、製茶が行われたことに起源をもつといわれる。明惠上人は梅尾や宇治に茶を植えたほか、全国各地に茶を普及させ、なかでも大和の寶尾、伊賀の八島、伊勢の河居、駿河の清見、武蔵野の河越が、当時の茶の五場と呼ばれた（中島, 1937）。河越茶はその後衰退したが、「重闘茶場碑」にみられるように吉川温恭らが1802年（享和2）頃に復活し、江戸末期から狭山茶として知られるようになった（大護, 1973）。横浜の開港とともに茶の輸出が行われるようになり、茶栽培は拡大し、1897年（明治30）には埼玉県全域で約1,800haの栽培面積となり、明治期末に2,100haにまで増加した。この頃の狭山茶の特徴の1つは、品質がよいこと、茶園が畦畔にあること、そして浸出度が高いことであったといわれる。

「明治四十四年金子村事務報告書及村有財産表」によると（入間市史編さん室, 1989）、

この当時の金子地区で課税対象となった民有地は 1,044.2ha であり、そのうち宅地が 58.4ha、水田が 14.3ha、畠地が 503.2ha であり、残りの 568.2ha が山林・原野・雑種地であった。畠作が主体であったことは明治初期と同様である。1910 年（明治 43）の畠地での主要な冬作物は小麦と大麦で、それぞれ 86.8ha と 130.0ha の作付面積であった。このほかに裸麦や豌豆が生産されていた。夏作物としては陸稻と甘藷と粟があり、このほかに茶と桑が植えられていた。1910 年（明治 43）は豊作で茶は 10,932 貢、養蚕は春蚕と秋蚕をあわせて 12,756 貢の収穫があった。5月初めから 6 月 10 日頃までの春蚕に従事する農家は 299 戸で 6,516 貢の収穫をあげ、9月初めから 10 月 5 日頃までの秋蚕に従事する農家は 329 戸で 5,450 貢の収穫をあげた。夏蚕には 36 戸が従事するにすぎなかった。このほかに女性の貢織りが盛んであった。「大正二年金子村事務報告書」には、1912 年（大正元）の農産物収穫量と産額が記載されているが、それによると養蚕が全農産物価格の 34.4% で、茶が 16.4% を占めていた。これらに大麦の 14.7% と陸稻の 10.0%、甘藷の 8.8% が続いていた。基本的には明治初期からの生業の状況が続いていたが、養蚕と茶業の重要性が高まったことがわかる。なお、1915 年（大正 4）頃には茶園面積は 5.99ha で、農地面積からみるとそれほど広くなかった。しかし、「大正九年金子村事務報告書」には、「製茶期節ノ出席不良ナルニ鑑ミ尋常四年以上ニ限り左ノ如ク繰替休業ヲ行ヘリ 五月二十三日ヨリ六月 5 日迄十四日間休業シ（内二日ハ日曜）八月一日ヨリ同六日迄六日間ニ及ビ、九、十、十一、十二月ノ日曜日ニ各一日授業ヲ行ヘリ」と記されているように、茶の農繁期には小学生も農業労働に加わる忙しさであった（入間市史編さん室、1989）。

図 3-2 は 1937 年（昭和 12）年に修正測図された陸地測量部による 2.5 万分の 1 地形図に基づいて作成した土地利用図である。1881 年（明治 14）の土地利用と比較すると、加地丘陵の南麓の集落と水田には大きな変化がなかったが、台地上の畠地の多くが桑園となり、桑園の間に小さな茶園が散在するようになった。南部の林地は大部分が存続しているが、一部が畠地や桑園に転換された。

1931 年から 1938 年までの金子村勢要覧によると（入間市史編さん室、1990）、年によっても変動があるが、養蚕は農産物全体の 30~40%、茶業は 15~25% の産額をあげており、この 2 つで農産物全体の半分以上の産額をあげていた。1931 年の埼玉県茶業研究所の「業務功程」によると、耕耘は 9 月中旬の深耕と 3 月中旬と 6 月上旬、7 月下旬の浅耕を行い、施肥としては秋肥が 9 月中旬、春肥が 3 月中旬、追肥が 6 月上旬と 7 月下旬に行われた。施肥量は 10a の成分量で窒素 29kg、磷酸 13.5kg、カリが 14.5kg であった。成分量では、窒素については硫酸アンモニウムにより 14.5kg、磷酸については過磷酸石灰により 7.9kg、そしてカリについては硫酸カリによって 7.1kg が投下された。半分が化学肥料によるもので、残りは堆肥や鶴糞、大豆糞、菜種油糞などが使用された。収穫は一番茶で 5 月 15 日から 6 月 13 日に行われ、10a 当りの生葉生産量は約 400kg であった。二番茶は 7 月 8 日から 7 月 25 日まで収穫され、その収量は 360kg であった。

3) 食料増産とともに茶栽培と養蚕の衰退

1930 年の生糸価格の大暴落をきっかけに始まった昭和恐慌によって、繭にみきりをつけた農家が桑を引き抜き茶を播きつけるようになった。金子台の製糸業と養蚕業は昭和恐慌を契機に衰退傾向になり、これに代わって茶業が拡大していった。ところが 1937 年（昭和 12）には日中戦争が始まり戦時体制が深刻化すると、嗜好品の茶の作付けが統制されるようになった。茶園は食料増産のために大幅に伐採され、その跡地

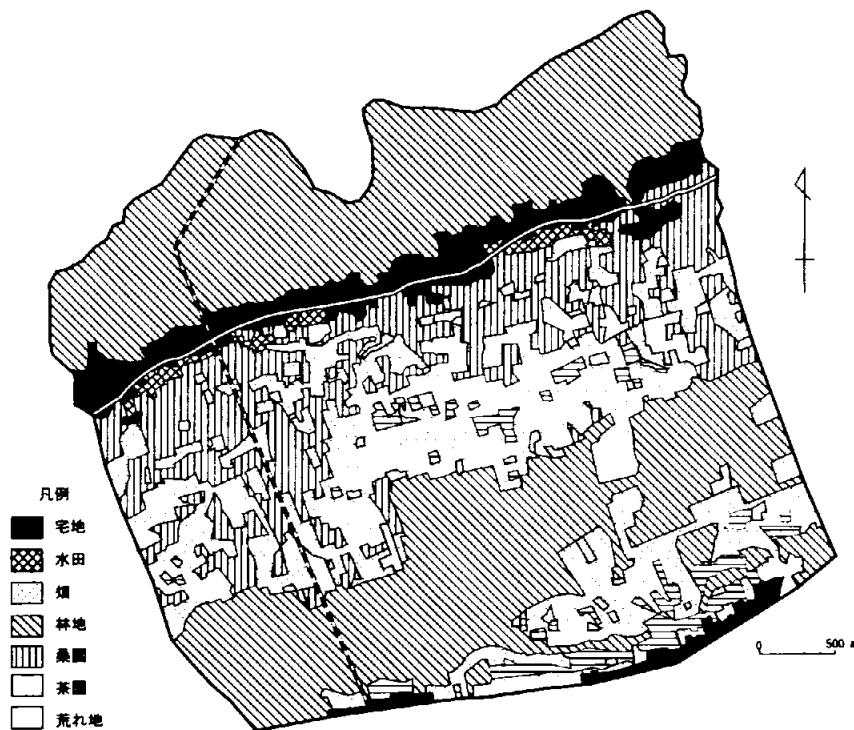


図3-2 入間市金子地区的土地利用（1937年）
大正12年測図、昭和12年修正測図 陸地測量部 2.5万分の1地形図「青梅」により作成

に麦類や甘藷が植えられた。1930年代中頃には1,400haほどあった狭山茶の栽培面積は、終戦時の1945年には938haにまで減少してしまった。統制経済の影響で茶業資材も配給となり、なかでも燃料の配給は製茶に深刻な影響を与えた。また、出征による労働力不足も製茶にとって大きな問題であった。

桑や茶に代わって麦類や陸稻、甘藷などの食用作物の栽培が拡大されたが、肥料の不足によって生産量は伸びなかった。化学肥料の供給は、肥料会社が爆薬製造などへ転換したことによって、急激に減少した。そのため、落葉や人糞尿などに依存せざるを得なかった。

4) 第2次世界大戦後の茶業の復活

茶と麦類、甘藷は金子地区を含む金子台の基幹作物であり、第2次世界大戦後の食糧不足の時期には、地域をあげて増産された。この間多くの農家が、当時の食糧不足を背景に茶や甘藷、麦類などの農産物の生産と販売によって収益をあげ、それが後の茶業発展の経済的基盤となつたといわれている（入間市史編さん室、1994）。

1946年にはアメリカ合衆国からの食料やさまざまな物資供給の見返り品として、茶が輸出されることになった。狭山茶の栽培面積も1946年の983haが、1947年には1,062haに、1949年には1,448haとなり、わずか4年間で戦前の水準に復した（大護、1973）。埼玉県は茶業復興五か年計画を樹立し、茶園の増反、製茶の増産、輸出の増進を進めた。この五か年計画はほぼ成功し、さらに1957年から第2次五か年計画が策定された。1961年に埼玉県全体で茶園面積が2,349ha、生産量は2,334tとなった。化学肥料の供給も回復し、1952年の埼玉県茶業研究所の基準では、成分量で窒素は22.5kgのうちの75%が、リンは11.25kgのうちの73%が、カリは11.25kgのうちの98%が化学肥料によるものになった。堆肥や鰯粕も使用されたが、その重要性は低下した。翌年から施肥基準がかわり、成分量で窒素30kg、リン15kg、カリ15kgになり、

70%ほどが化学肥料によって供給する基準が定められた。

1950年代の金子地区の農業は基本的には第2次世界大戦前の性格を残していた。図3-3に示したように、1955年の総経営耕地面積は502.9haであったが、収穫面積からみれば甘藷の195haが最も広く、麦類の159.0haと陸稻の111.0haがこれに次いでおり、茶と桑の収穫面積はそれぞれ63.4haと75.9haであった。また、1950年の金子地区の総農家数は669戸であり、そのうちの64.0%にあたる428戸が専業農家で、152戸の第1種兼業農家を加えると、全体の86.7%が農業に強く依存していたといえる。

3.3 茶栽培の拡大と農業経営の変化（1960～1980年）

1) 農業経営と土地利用の変化

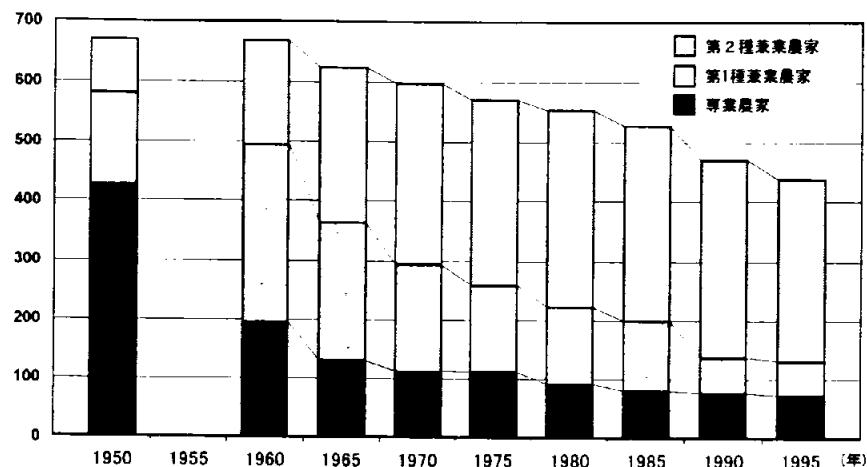
入間市金子地区でも1960年頃から農業経営が大きく変化していく。1960年の収穫面積によると、麦類が237.7haと最も多く、これに陸稻の149.3haと甘藷の122.2haが続いている。従来からの自給目的の主穀作物中心の農業が継続していたことがわかる。他方では、茶園が133.2ha、桑園が76.2haあり、これらが主要な商品作物であった（図3-3）。ところが1970年には麦類の収穫面積は49haに、陸稻は36ha、甘藷は21haに激減し、1975年にはこれらの伝統的主穀作物はほとんど姿を消してしまった。また、桑園も1970年には31ha、1975年には12haとなってしまった。これと対照的に大きく拡大したのが茶園であり、1970年には259haとなり、1960年の2倍近くになった。この年の総経営耕地面積が482haであったことから、茶園は53.7%を占めたことになる。1960年代は日本のいすれの農村でも様々な商品作物の導入が試みられたが、金子地区では茶のほかに、ゴボウ栽培と養豚、養鶏が拡大した。

入間ゴボウは大正末期に京都の青物問屋が甘藷の買い付けにきて、ゴボウの適地であることに目をつけ、当時の入間郡農会を通じて契約栽培を始めたものであった。1940年頃まで需要の増大と価格の上昇により栽培が拡大したが、第2次世界大戦中の作付け制限により激減した。戦後はふたたび増加し、1960年頃には戦前の2倍の収穫面積に達した。ゴボウは土壌が軽鬆質で腐食の含有量に富み、通気・通水がよく、しかも保水力が高く地下水位が低い所に適するので、金子地区はほぼこの条件に適していた。養豚は収益の回収が早く、副収入源として有利なため、有機質肥料として厩肥を必要とする中規模経営の農家で、2～3頭を飼育するのが一般的であった。特に金子地区では茶栽培と組み合わせる農家が多く、豚の糞尿は茶の堆肥の原料として利用された。採卵鶏も投下資本が少なく収益の回収も早く、狭い土地でも高い利潤をあげることができるので、労働力不足に悩み、現金収入源を求める都市周辺部の農民に歓迎された（青野・尾留川、1968）。

図3-4は1966年改測、1968年修正測量の国土地理院発行の2.5万分の1地形図から作成した土地利用である。第2次世界大戦前の土地利用と比較すると、まず、桑園がほぼ姿を消し、それにかわって茶園が増加したことがわかる。かつての桑園が茶園に転換されたことは、1937年（昭和12）の桑園の分布パターンと1968年の茶園の分布パターンが類似していることから推測できる。しかし、1968年の茶園は分散的であり、普通畑のなかに散在しているといった状況であり、地図から見る限り普通畑の方が相対的に広い。また、点的であるが、畠地の中に住宅地や公共施設が増加した。南部の林地は南西部を除いてほかの土地利用に転換された。中央部はゴルフ場になり、東部は区画されて畠地と茶園になった。西部は1934年（昭和9）に開設された陸軍狹山飛行場の跡地であり、金子地区に含まれる当初の面積は43.4haであったが、1937

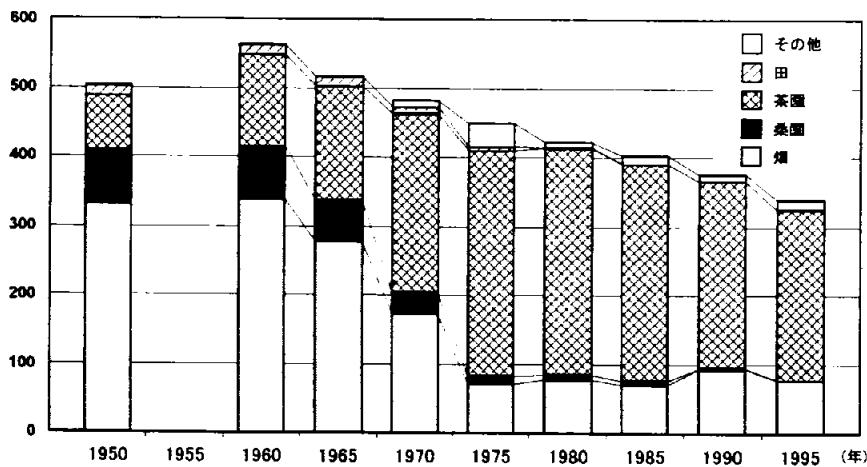
a) 専兼業農家数

(戸)



b) 経営耕地面積

(ha)



c) 収穫面積

(ha)

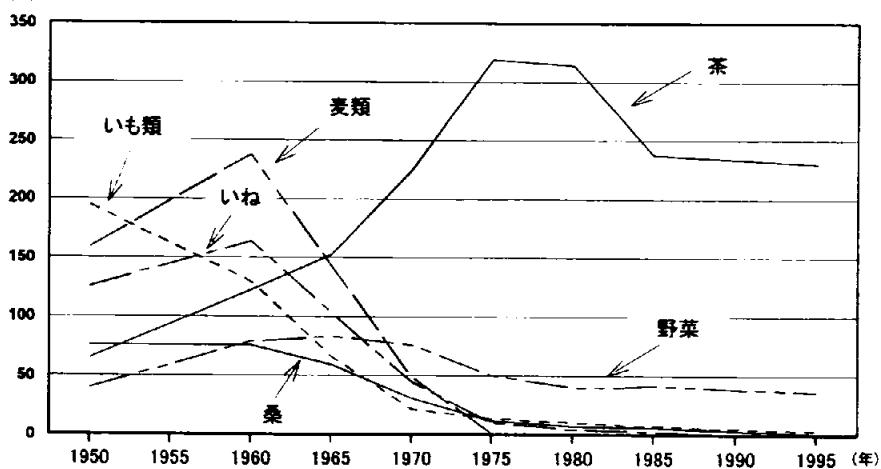


図 3-3 入間市金子地区における農家と土地利用の変化
農業センサスにより作成



図 3-4 入間市金子地区の土地利用（1968年）

大正12年測図、昭和41年改測、昭和43年修正測量
建設省国土地理院 2.5万分の1地形図「青梅」により作成

年(昭和12)に拡張されて73.4haとなっていた。戦後復員軍人の入植者に貸与され、開墾されたが、その後一時アメリカ軍に接収されたが、1961年には返還された。隣接する東金子地区における飛行場跡地は、武蔵工業団地となった。

2) 茶栽培の拡大と農業経営の分化

1960年から1980年までは山田(1970)や宮沢(1984)が指摘するように、桑園・普通畠から茶園への転換が進み、農業の中で茶園を中心となっていました時期である。図3-3からもわかるように、1960年代と1970年代の兼業化の進行は著しく、これと茶園面積の拡大傾向が時期的に一致する。農業労働力が不足した兼業農家が農業経営を維持するためには、省力化の可能な作物を選択する必要があり、そのため茶が選ばれたのである。茶は摘採期を除くとあまり手間がかからない作物であり、さらに1960年代から摘採などの機械化が進み、省力化が一層進んだ。そして、これらの農家は、製茶工場へ生葉を供給する「生葉売り農家」となっていった。この時期には農家数が減少しており、経営規模の小さい農家は農業を断念し、ある程度の規模をもつ農家は省力的で経済的に有利な茶栽培への転換を行った。

この時期には茶栽培を核として、農業経営が大きく分化した。稻葉(1985)の研究に基づいて、この状況を整理してみよう。入間市と所沢市、狭山市の54戸の茶業農家を対象とした埼玉県茶業試験場の調査によると(埼玉県茶業試験場, 1981)、1980年頃の金子台とその周辺の茶業農家を、まず「生葉売り農家」と「製茶農家」に大きく分類することができた。前者は生葉の収穫のみを行い、加工しないで製茶工場

へ売る農家であり、54 戸中 18 戸がこれに相当した。残りの 36 戸は後者であり、これは製茶工場をもった農家である。「生葉売り農家」はさらに他の農業部門と組み合わせる A タイプ（複合経営専業農家）と、農外就業と茶栽培を組み合わせる B タイプに細分することができた。A タイプの農家は 7 戸を数え、茶業と養豚を 2 本の柱として農業経営を行っている場合が多かった。5~8 月を除けば手がかかる茶栽培との労働力面での調整と、豚の糞尿から作った堆肥が茶には適しているという利点が養豚にはあった。残りの 11 戸の B タイプの農家では、世帯主もしくは後継者が農外就業に従事しており、労働力が不足するため、家畜飼養も行うが規模が小さく、茶を主要作目としている。

狭山茶業地域では 1~2 戸を除きすべてが個人工場で製茶を行っている。それはここが都市化地域であるので、製茶農家小売店卸しや直接小売りをすることが可能であり、その際には個人工場の方が有利であったからである。製茶農家のほとんどが、茶業専門であり、茶の栽培面積も大きかった。製茶農家をさらに細分すると、買葉率 0% の自園自製農家の C タイプ、買葉率 0~50% の自園兼買葉農家の D タイプ、買葉率 50~90% の買葉兼自園農家の E タイプ、そして買葉率 90% 以上の買葉農家の F タイプとなった。C タイプは茶園面積は広いが、茶園率が低かった。「やぶきた」や「さやまかおり」などの優良品種への転換の程度を品種化率と呼ぶが、C タイプでは品種化率が低かった。年間生葉処理量も多くなく、荒茶のままで問屋に出荷する多かった。また、茶業のほかの農業も行っていた。54 戸の事例農家のうちの 3 戸がこれに該当した。D タイプは 13 戸を数え、耕地面積は少ないが、茶園率は高く、茶園面積は C タイプと同程度で、茶業に専業化していた。荒茶のまま問屋に卸す農家と、上茶にして小売りを行う場合があった。E タイプは年間生葉処理量のうち自園の生葉よりも買葉の方が多い農家である。経営耕地は狭いが、茶園率も品種率も高かった。自園の生葉では不足するので、生葉売り農家と契約していた。この E タイプは直接小売りする農家がほとんどであった。茶の栽培と収穫、加工、販売を総て行う狭山茶業地域において最も典型的とみなされる農家で、17 戸がこれに相当した。残りの 3 戸は耕地は少ないとすべて茶園としており、小売り量が多く、生葉処理量も多かった。製品の販売を重視しているために、農業というよりは工業あるいは商業を中心の経営を行っていた。

稻葉はこれらの諸タイプの経営の変遷を調査した結果、茶業農家は図 3-5 に示すように分化してきたことを指摘した。すなわち、生葉売り農家と製茶農家は第 2 次世界大戦前は同じを増やして工場をもつ製茶農家と、工場へ生葉を売ることによって利益を得る生葉売り農家の 2 形態に分化した。さらに 1960 年代になって生葉売り農家と製茶農家が、それぞれの内部で分化した。分化の要因は、生葉売り農家の場合には茶園面積の大小と茶業を主とした時期の違いによるものであり、製茶農家の場合は都市化の影響であると考えられる。

これまで述べたような 1960 年からの茶栽培の拡大の結果、1980 年には総経営耕地面積経営形態で、多種の経営部門を組み合わせる A タイプであった。しかし、1955 年頃から茶園 422ha のうちの 78.1% にあたる 343ha が茶園となった。畑作物としては、収穫面積が 40ha の野菜と 10ha の甘藷を除くと、みるべきものがなくなってしまった。1983 年の土地利用図からもこのことが読みとれ、かつての畠地はほとんどが茶園に転換されてしまい、その中に普通畠が点在するという状況になってしまった（図 3-6）。旧来の集落の周辺や八高線金子駅周辺で宅地が拡大したほか、南部でも工場や大学が進出し、都市的な要素が強まっていった。

特 徴

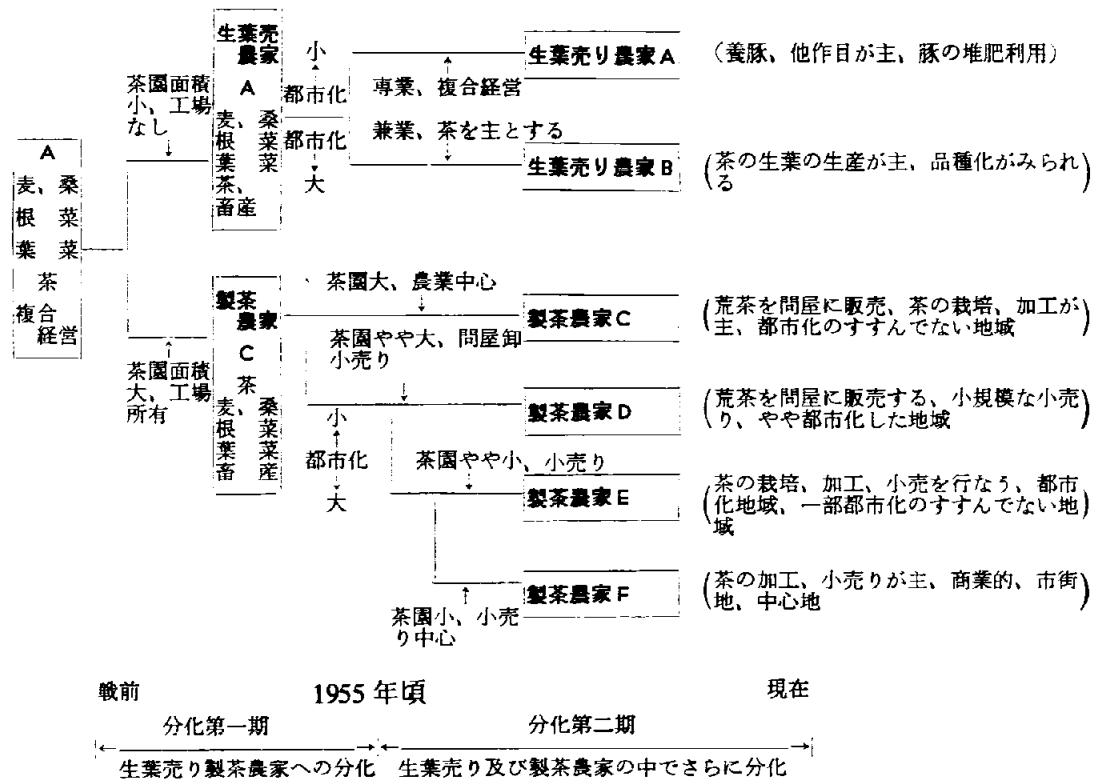


図3-5 狹山茶業地域における茶業形態の分化（模式図）

稲葉俊彰(1985)より引用

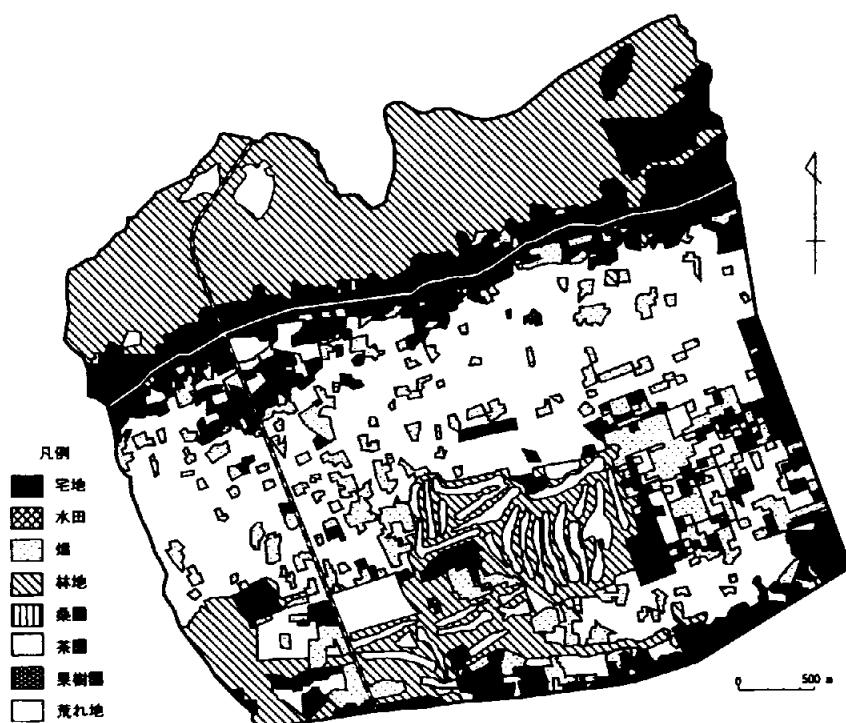


図3-6 入間市金子地区の土地利用 (1983年)

大正12年測図、昭和51年第2回改測、昭和63年修正測量
建設省国土地理院 2.5万分の1地形図「青梅」により作成

3) 茶栽培技術の変化

すでに述べたように狭山茶は元来関東ローム層の軽鬆な土壌が飛ばされることを防ぐために栽培が行われ、大部分が畦畔茶園であった。1946年の中空写真によると、北西の風に直行するように畦畔茶が植えられていた。茶の品質を高め、生産性を向上させるためには、固定された優良品種導入が不可欠であり、1960年代には急速に本茶園化が進み、それまでの畦畔茶園に代わっていった。

また、1950年代までは茶の摘採は手摘みや、鉄摘みで行われていたが、1960年頃から背負い式の一人用動力摘採機が導入された。さらに1960年代後半には二人用の可搬型摘採機が導入され、摘採の省力化と能率向上に大きく貢献した。折からの生産拡大と兼業化の進展もあって、茶業の省力化は急速に進んだ。

狭山地域は製茶機械の発祥の地であるといわれるが、機械化は全国水準からみるとかなり遅れた。摘採の機械化により1950年代から1日の摘採量が増加したが、規模の小さい自園自製農家では、加工が追いつかないという状況であった。背面吹き込み式粗揉機の導入、各工程連結装置や自動取り出し装置の普及は、ようやく1960年代に入ってからであった（太田、1985）。農業労働力の減少にともない、製茶機械もしだいに大型化し、1970年代後半にはそれまでの30kg機から60kg機へ転換されるようになった。

3.4 都市化の進展と茶栽培の後退（1980年以降）

1) 都市化と土地利用の変化

1993年の土地利用で目立つのは、まず金子地区の中央部を首都圏中央連絡自動車道路（圏央道）が通過するようになったことで、これにより関越道や首都高速道路方面への近接性が高まった（図3-7）。それとともに、都市化が大きく進展した。加地丘陵の南の既存の集落が拡大し、丘陵地にも住宅団地が建設された。南部でも工場や博物館や高等学校、ゴミ処理施設などの公共施設が建設された。これによって、茶園や普通畑は縮小し、1960年には564haあった経営耕地は1995年には339haと、わずか60%になってしまった。現地での観察によると、放置されたままの茶園や資材置き場や空地が多く、ほかの土地利用への漸移的段階にある農地が目立ち、地形図から読み取ることができる以上に農業の後退が進んでいる。

図3-3からもわかるように農家の減少は1980年代以降も続き、1980年の総農家数は1995年には438戸になってしまった。専業農家と第2種兼業農家は1980年代以降大きく変化しなかったが、第1種兼業農家が激減した。金子地区の茶園は1980年に328haとピークに達したが、その後減少し始め、1995年には247haに後退した。しかし、全体の経営耕地面積に占める茶園の面積は1995年で73%と、茶業に特化した状況は変化していない。

1980年頃までの茶業農家の分化の状況についてすでに説明したが（図3-5）、それ以降茶農家はどのように変化したであろうか。聞き取りによると、まず養豚など他の農業経営部門と組み合わせていたAタイプが激減して、生葉売り農家はほとんどが、Bタイプの兼業農家になり、茶の栽培面積も縮小してきている。そのため現在では収穫が土曜・日曜日に集中し、加工が追いつかないという事態になっている。製茶農家ではCタイプが特に減少しており、荒茶まで製造して問屋に販売するか、茶の栽培から加工、小売まで行うEタイプやFタイプの減少率が相対的に少ない。表3-2は農業センサスに示された農業経営組織別農家数の推移を示したものであるが、1960年代

には複合経営農家が多数を占め、茶業と養豚あるいは養鶏、野菜栽培などを組み合わせていたものが、しだいに単一経営が主体になってきており、しかも工芸作物、すなわち茶に特化してきていることがわかる。茶の単一経営農家は、農外就業と生葉売りを組み合わせるタイプと、茶を加工して販売するといった農業と商業の組み合わせるタイプに分化してきている。いずれもかつて稻葉（1985）が指摘したように、都市の影響を強くうけている茶業地域の特徴といえよう。狭山茶業地域は、茶農業協同組合によって大規模に共同製茶を行うことによって産地再編が進んでいる静岡県牧ノ原の茶業とは（国澤ほか、1997）、異なった方向で変化している。



図3-7 入間市金子地区の土地利用（1993年）

大正12年測図、昭和51年第2回改測、平成5年修正測量

建設省国土地理院 2.5万分の1地形図「青梅」により作成

表3-2 入間市における農業経営組織別農家数の推移

単位（戸）

年	総農家	単一経営農家*（下は第1位の経営部門）						複合農家
		合計	工芸作物	養豚	養蚕	野菜	その他	
1965	585	191	72	49	30	14		394
1970	587	454	329	44	-	17		133
1975	539	492	399	46	-	14		47
1980	517	496	430	28	2	15		21
1985	390**	368	285	32	1	27		22
1995	310**	301	259	10	-	11		9

*単一経営農家とは農産物販売金額第1位部門の販売金額が、総販売金額の60%以上を占めるもの

**農業センサスの農家の定義が変更 農業センサスにより作成

2) 茶栽培技術

1980 年以降も茶業技術の改善が進んだ。1960 年代から本茶園化が進んだことはすでに述べたが、在来種では木ごとに性質が異なり、茶の畠もそろわざ摘採期もまちまちなので、優良品種に統一する作業が進められた。1960 年代には「やぶきた」が普及し、さらに 1980 年代には埼玉県茶業試験場で「やぶきた」の自然交雑実生から選抜・育成された「さやまかおり」が導入され、その後「ふくみどり」の普及が試みられた。1997 年における埼玉県の品種化率は 85% であり、品種化された茶園の 80% が「やぶきた」によって占められ、「さやまかおり」はわずか 12% を占めるにすぎない。狭山地域では耐寒性の強い品種が望まれるほかに、同一品種では摘採や加工の時期が集中したり、病害虫の被害をうける危険性があるために、多様な品種構成がはかられ、上記の 3 品種のほかにも「ほくめい」や「むさしかおり」といった品種が育成されている（入間市博物館, 1999）。

狭山地域は商業的茶栽培の北限に近く、寒さをいかに回避するかが永年の課題であった。中でも春になって新芽が出る頃に、晩霜によって受ける凍害は大きな問題であった。1970 年代後半から防霜ファンが設置され、これが晩霜害の回避に大きな役割を果たすようになった。1ha の防霜ファンを設置するためには、400～500 万円の費用が必要である。さらに茶栽培の機械化はますます進み、1990 年代に入ってからは、数は多くないが茶園にレールを設置し、乗用摘採機を導入する農家も出現している。この機械の難点は道路を自走することができず、移動のためにはトレーラーが必要になることである。最近ではキャタピラをつけた摘採機が開発され、移動が簡単になったが、圃場の土を踏み固めるという不都合な面もある。また、製茶機械がますます大型化し、最近では 90kg の能力のものまで導入されるようになった。

最近の栽培技術の特徴としては、環境保全の観点から有機肥料による施肥体系や、緩効性肥料を使用して年間施肥量を減らした施肥体系が注目されるようになってきた。前者は成分量で 10a 当たり窒素を 45kg、磷酸 22.5kg、カリ 22.5kg を投入するものであるが、ナタネ粕や魚粕を多く含む有機配合肥料を用いるものである。後者は緩効性肥料を用いることによって、成分量で窒素 36kg、磷酸 16kg、カリ 13kg に抑えるものである。最近は「やぶきた」や「さやまかおり」などのへ品種が統一されたために、病害虫が増えている。それでも 1970 年代から 1980 年代と比較すると、防除回数は減少している。減農薬による病害虫の総合制御体制がとられ、化学合成農薬による防除を基幹としながらも、天敵や天然物資材、耕種的防除を組み合わせることによって、病害虫を抑制する工夫が行われている。

3.5 むすび

この報告では入間市金子地区を中心に農業経営と土地利用の変化を検討した。明治期以降の農業変遷を整理すると、1950 年代までは麦類や陸稻、甘藷などの食用作物を中心に、養蚕と茶栽培を組み合わせるといった伝統的な農業経営と土地利用が続いていた。金子地区を含む金子台の農村は、水田が少なく、畑作に依存せざるを得なかつた。畑作は水稻作と比較するとはるかに収量は低く、年による変動が大きく不安定であった。それだけに有利な商品作物生産が不可欠であり、その意味で養蚕と狭山茶の生産は重要な役割を果たした。第 2 次世界大戦前は、このほかに女性を中心とした縞木綿の生産が経済的に大きな意味をもっていた。

第2次世界大戦によって茶業と養蚕業は一時衰退するが、戦後茶業が拡大し、1970年頃には金子地区は茶業中心の農村になった。畠畔茶園から本茶園への転換、品種化、茶栽培や加工の機械化などが進んだ。農外就業が農家に浸透した結果、収穫時期のほかは多くの労働力が必要でない茶栽培に転換し、生葉売りを行う農家が急増した。さらに都市化の進行は、製茶農家も多様な経営形態に分化させた。

金子地区を含む狭山地域の茶業は、茶の栽培者が加工し、それを販売する点にあり、それは大都市への近接性によって支えられている。都市化の影響は狭山茶業存立の基本的な条件であるとともに、狭山茶業を変質させ衰退させる可能性をももっている。1980年代以降はこの地域において都市化の影響がますます強まる中で、茶農家が減少し、兼業化が進み、さらに商業志向が強まるという傾向がみられる。

茶業技術が進歩する中で最近の新しい傾向としては、環境保全型の茶栽培を行うために施肥体系を工夫したり、防除の方法を改善する動きがみられることである。1960年代から1970年代にかけての多投入による生産性の向上といった姿勢は、確実に変化してきている。

本報告の作成にあたって、埼玉県茶業試験場の岡野信雄次長にご教示を得た。また、入間市役所の農政課とみどりの課、入間市金子地区の農家の方々にお世話になった。筑波大学大学院地球科学研究所の藤永 豪氏には現地調査を手伝っていただき、筑波大学大学院教育系研究科の川久保典昭氏には資料整理をしていただいた。以上の方々に心から感謝申しあげる。

参考文献

- 青野壽郎・尾留川正平編(1968) :『日本地誌 第6巻 群馬県・埼玉県』二宮書店, 470p.
稻葉俊彰(1985) :狭山茶業地域における茶業形態の分化. 埼玉地理, 9, 8-17.
入間市史編さん室編(1989) :『町村事務報告書(明治・大正編) 入間市史調査集録 第6号』入間市, 319p.
入間市史編さん室編(1990) :『町村事務報告(昭和編Ⅰ) 入間市史調査収録 第8号』入間市, 342p.
入間市史編さん室編(1994) :『入間市史 通史編』入間市, 1050p.
入間市博物館編(1999) :『北限への旅路-茶の自然と歴史を訪ねて-』入間市博物館, 95p.
太田義十(1985) :『狭山茶五十年の歩み』狭山茶倶楽部, 261p.
大護八郎(1973) :『狭山茶業史』埼玉茶業協会, 225p.
国澤恒久・小松直子・真崎恒一郎(1998) :静岡県島田市坂本地区における茶業地域構造. 「大井川のみえる風景」1997年度地理学野外実験報告, 29-54.
埼玉県茶業試験場(1981) :経営に関する試験成績. 埼玉県茶業試験場.
中島幸太郎(1937) :『狭山茶場誌』北狭山茶場碑建設会, 108p.
宮沢松男(1984) :狭山茶業地域の農家とその茶業経営の特色. 埼玉地理, 8, 29-35.
村本達郎(1952) :狭山茶. 地域, 1(1), 30-35.
村本達郎(1960) :狭山茶の中心と加地丘陵. 地理, 5, 761-768.
山田邦彦(1970) :狭山茶栽培地域の展開. 埼玉研究, 19, 1-9.